

## ◆SDGs（持続可能な開発目標）と人文学（2）

### —地域からの取り組み—

#### 「持続発展都市への挑戦 SDGs 未来都市豊島区

誰一人残さないまちへ」（奥島 正信 氏 豊島区政策経営部長）

#### 豊島区政の歩み

豊島区は 2012 年に財政破綻寸前の危機的状況を経験。また 2014 年に日本創生会議によって東京 23 区内で唯一の消滅可能性都市に選出されるなど、近年数々のピンチに直面してきました。しかしこうしたピンチを、今の豊島区政につながるようなチャンスに変えるよう、持続発展都市へ向けて、消滅可能性都市の指摘を覆すための取り組みを推進してきました。

2019 年、わが国を代表して、東アジア文化都市として、国際文化都市への扉を開くという区政が始まりました。東アジア文化都市というのは、日中韓の文化大臣会合の合意に基づき、参加国の文化芸術による発展を目指す都市を毎年 1 都市選定して、文化交流などを実践する国家プロジェクト。会期中に実施した事業数については約 400 事業で参加の延べ人数としては約 350 万人という膨大な数字になっています。

続いて「オールとしま」と称して、さまざまなステークホルダーと、公民連携による区政運営を進めています。区民の皆さまはもとより、国際アート・カルチャー都市特命大使、これ、1,400 名の方が加盟されています。立教大学をはじめ区内の 7 大学とは連携協定を締結して、さまざまなトライをしています。

今後も 2030 年に向けた SDGs への挑戦、そしてその先にある国際アート・カルチャー都市を実現していくために、SDGs の 3 側面、経済、社会、環境の好循環を取り入れた区政をさらに進めていきます。

#### 豊島区「SDGs」の具体的な展開

豊島区 SDGs の具体的な展開についていくつかご説明します。まず「SDGs 未来都市豊島区」についてです。豊島区は昨年、東京の自治体としては初となる、未来都市とモデル事業のダブル選定を受けました。

次に豊島区の SDGs への取り組みですが、民間企業の場合は、従来の CSR 活動など、社会

貢献と新たなビジネスチャンスの両立、そして長期的な視点での経営を考える道しるべ、企業のガバナンスという側面から取り組まれてると思います。自治体の場合は、極端に言うと、SDGs も全て行政の中の施策、事業に結び付いているのではないかなと思っています。その中でも豊島区の場合は、文化を基軸として SDGs に取り組みながら、持続可能なまちづくりを実践しています。

次に「としま SDGs 都市宣言」についてですが、こちらは SDGs 未来都市の選定を受け、地域の多様な主体との連携を広げながら、SDGs の理念を踏まえた、持続可能なまちづくりを推進していこうとするもの。簡単に申し上げると、よりよい未来をこれからの世代に引き継いでいけるよう、私たち一人一人が SDGs の理念である「誰一人取り残さない社会の実現」を目指し、行動していくことを宣言したものです。

最後に、池袋駅周辺、4公園を核としたウォーカブル推進の取り組みとして、SDGs モデル事業にもなっている、池袋駅周辺4公園を核としたまちづくりを行っています。これは歩行者中心のウォーカブルなにぎわいと多様な文化によって、地域の活性化を進めていくものです。

## 区内の大学と連携して「SDGs」の取り組みを進める

豊島区には7つの大学あり、連携協定を締結して各種の取り組みを進めています。昨年、豊島区「SDGs 未来都市」、「自治体 SDGs モデル事業」の選定を受けたことを契機として、SDGs の取り組みについて、大学、地域の持続可能な発展に向けてというテーマのもとに、懇談会を実施しました。

懇親会では、「SDGs を達成するには、各大学単独での取り組みではなかなか困難である」という意見をいただきました。その中で豊島区がハブとなって各大学の取り組みを高め、横串を刺すような役割を担ってほしいということ、そのトータルとしてゴールを達成するような仕組みをつくってもらいたいという貴重な、そして豊島区にとっては身の引き締まるようなご意見も頂戴しています。今回のシンポジウムについても、こうした大学さんとの連携の中での1つ。今後、さらに進めていければと思っています。

---

## 「東日本大震災からの復興と地方創生」

(伊藤 雅人 氏 マルゴト陸前高田代表理事、陸前高田市まちづくり  
戦略アドバイザー)

## 「ノーマライゼーションという言葉がいないまち」を目指す陸前高田

震災から 10 年、私は陸前高田市で、町の復旧、復興に携わってきました。町としては、誰一人取り残さない社会の実現をしていこうということで、「ノーマライゼーションという言葉のいないまち」を掲げています。私も知的障害の福祉施設に勤めていましたが、障害があるというだけで、家の外には出してもらえない利用者もいらっしゃいました。そういった人たちが外に出られる、共生の町をつくろうということです。

たとえば町のショッピングモールには車の縁石、車止めの縁石がありません。なぜかと言うと、目の見えない方にとっては、車止めの縁石がとても邪魔になるそうです。また目の見えない方々に必要な点字のプレートは、車いすユーザーの方々にとっては段差となり、とても邪魔になるそうなので、目の見えない方、そして車いすユーザーの方に集まっていただき、両者が納得できる高さの点字ボードを設置。このようにハード面の整備を進めてきました。

## パラスポーツと e スポーツで垣根のない交流を実現

私が代表理事を務める一般社団法人「マルゴト陸前高田」では、関東、関西方面からの修学旅行の受け入れを行い、そのなかで命の大切さ、自然の大切さ、人の優しさや、防災などを学ぶ場となっています。企業研修では、復興というビジョンを基に、行政、民間、市民がどのように連携するべきか、チームビルディングなどを学んでいただいています。

また陸前高田市のまちづくり戦略アドバイザーとしても活動しています。こちらはパラスポーツの体験会であったり、勉強会、e スポーツを通しての性別、障害、垣根を越えた交流イベントを通して SDGs を学ぶ、知る機会を「eSDGs」という造語を作り、提供しております。

なぜパラスポーツをやろうと思ったかという、パラスポーツを取り巻く環境があまり良くないことに気づいたからです。たとえば障害者サッカーは日本国内だけでも 7 種類あるのですが、東京パラで正式種目となったのはブラインドサッカーだけです。また車いすバスケのチームも、タイヤ痕が残るからという理由で体育館が使えなかったりと、現状は、パラスポーツが受け入れられていない土壌でした。だったら陸前高田市が受け入れようと、スポーツ施設はすべてバリアフリーにし、プールも車いすの方々が入れのつくりをしました。ただ障害を持った方を受け入れる場合には、ハードだけでなく、ソフト、つまり市民の理解も重要になるため、パラアスリートの方々に起こしいただいて、市民向けに講演会や体験会を開催しています。

パラスポーツともうひとつ、力をいれているのが e スポーツです。ゲームに着目した理由は、ある企業の方から「そもそも e スポーツは車いすに乗っていたとしても、コントローラーが持てればできるじゃないですか」と言われたのがきっかけです。2 年前にモンスターストライクの大会を開催したのですが、車いすの方もいましたし、山形からバスを乗り継いでやってきた高校生もいて、すごく盛り上がりました。

## 新しい伝統で人と人をつなぎ、未来へと託す

SDGs 実現のために、私は常に「共感」を意識しながら進めています。この共感のために必要なことですが、1つ目がストーリー、2つ目が分かりやすさ、3つ目がイメージを共有できるということだと考えています。

これを念頭に私がやってる事業のひとつが花火大会です。花火には五穀豊穡とか鎮魂の意味合いがあるので、楽しそうなおうえに、気持ちが伝わると思っています。また「花火×キャンプ」のイベントではスノーピークさんとコラボし、キャンプ用品がそのまま防災グッズになることを伝えました。楽しいこと、面白そうだなって興味を持って来てもらうことによって、結果的に防災や減災が伝わればいいんじゃないかと考え、企画したものになります。

東日本大震災の悲しいことや教訓は、時間がたてばどんどん風化していきます。ただ、皆さんの町でも夏祭りがあると思うのですが、その背景には伝統歴史があるわけじゃないですか。その祭りでデートしたり、楽しんだりすることで、伝統は人の思い出になってつながっていくと私は思います。

今、東北ではその人と人をつないでいけるような新しい伝統っていうものを一生懸命つくって、芽吹き始めているところ。ぜひ機会があれば陸前高田市、あるいは東北にお越しただけならなと思います。

---

## 「環境教育に果たす観光の役割—会津磐梯山地域での“自然の恵みと脅威”についての学びを中心に—」

(橋本俊哉 立教大学観光学部教授、ESD 研究所運営委員)

### 災害の記憶「噴火」を観光に生かすために

私は東日本大震災以降、災害と観光との関係についての研究をしてきました。2011年から岩手県の宮古市で、2013年からは磐梯山での調査をスタート。災害の種類としては、当初は風評被害の問題でしたが、16年度からは磐梯山の1888年噴火を対象として、観光にどう生かしていくのかという調査に取り組んでまいりました。

磐梯山は、「表磐梯」と呼ばれている猪苗代湖の方向から見ると、会津富士と呼ばれるほど優美な姿をしています。それに対して「裏磐梯」に関しては1888年に噴火し、山体崩壊をした際の爆裂火口、岩肌を露出させた荒々しい景観ということになっていて、磐梯朝日国

立公園の一番の目玉ともなる観光地になっています。

この地域は自然教育、環境教育で有名な地域で、小中高校生たちが多く訪ねるところであったのですが、3.11 後、パタッと動きがなくなってしまいました。その中で実際にどのような影響が与えられ、これからどうしていけばよいのかということ进行调查。そして結果を受けて、現地の調査パートナーといろいろ協議を行いました。テーマとしては、災害に強い観光地に向けた災害の記憶の掘り起こし、それをいかに観光に活用していくかということで、磐梯山の慰霊碑マップなどを作成しました。

## 観光の導入が風土の豊かさに気づくきっかけに

調査を踏まえたモニターツアーも企画、設計しました。風光明媚な観光地である裏磐梯の地区、それが 1888 年の噴火によって形作られました。そこには記憶を抱えながら暮らす住民がいて、この慰霊碑や岩の跡なども残っている、そうした恵みと脅威の両面を理解してもらうということが、自然災害大国で暮らす私たちの防災意識を高めて、教訓を伝承するためのメッセージを広めるうえで有効になるのではないか、というような考え方で企画しました。

2019 年 9 月 12 日にモニターツアーを開催。ガイドが 2 名同行して料金は 1888 年にかけて 1,888 円。近隣の方々にきちんと理解してもらうことが大切だという趣旨で行っているため、モニターツアーは会津若松までの近隣の市町村在住の方々 12 名が対象となっています。終わってから意見交換会を行ったところ、普段は素通りする場所の魅力を発見できた、ガイドの一言一言に非常に感銘を受けた、地域理解を深めるきっかけになったなどの話が出ました。まずは地元の方々に知ってもらえる第一歩になったのかなと思っています。

こうした観光の導入によって、受け入れる側の地域住民も意識が変化するという面もあります。被災しながらも長年住み続けてきた風土の豊かさについての魅力を、住民自らが改めて認識するきっかけにもなり、外の目を通して、慰霊碑を建立した先人の思いを自らが再認識できたようです。住民にとって外から来訪者があるというのは、生活の新たなアクセントになることもあり、慰霊碑が今以上に大切にされることが期待されます。

## 調査研究に大学が関わる意味

最後に大学が継続して関わるこの意味をお話します。これは調査研究を進めるということもありますが、もうひとつ学生たちが関わるということで、外の目線の遺伝子をつないでいく、という意味もあります。今の大学生は当時 3.11 のときには小学生だったわけです。関東に暮らしていて無力だった、自分は何もできなかったということが、この調査の参加動機になっているのです。恐らく実際、自分の記憶として覚えているという意味では、あと 5 年もないでしょう。それをどうつないでいくのか、社会的記憶として伝承していく仕組みづ

くりということでも、大学が関わっていくということが大事なのだと思います。

---

## 「全学共通科目で SDGs を主題とした授業を展開して」

(逸見 敏郎 立教大学文学部 学校・社会教育講座教職課程教授)

### 統計結果をもとに授業を組み立てる

春学期に全学共通科目、「SDGs とグローバルの可能性」という科目を展開いたしました。SDGs17 のゴール、169 のターゲットを授業の中で取り扱っていかうと考えたときに、まず学生が今どのような状況にあるのかを把握した上で授業展開を考えようということになりました。SDGs の認知率というものが 2019 年に世界経済フォーラムから発表されていますが、これによると日本は最下位。学生もあまり SDGs については知らないのではないかという前提を一つ持ちました。

統計を基に、ジェンダーについてはあまり知らない学生が多いのでは、など様々な議論を経て、グローバルレベルそれからローカルレベルの SDGs ということを取り扱っていかうと決定しました。

キャッチフレーズをつけるとしたら、「書を携えて町に出よう」。まずは知的なところでちゃんと学び、自分が体験してきたことを相対化して捉えるということ、この授業の狙いと考えました。

### 多種多様なゲストスピーカーを呼んで授業を展開

この授業は多くのゲストスピーカーを迎えて展開しています。最初の 2 回～6 回までは SDGs の概論や、あるいはこの授業の中で取り上げるゴールの概説というようなことで、ゲストスピーカーを人選しています。

前半のこの概論の部分は日本経済新聞社の方、これは昨年度、別の授業で関係ができた方をお願いして講義をやっていただきました。それから埼玉県が多くの知見をお持ちということで、埼玉、特に県北部をメインにローカルを考えるということで、埼玉県の SDGs 推進担当の方にもお話をいただくということになっております。

11 回目の授業では「SDGs 未来都市を考える」ということで、「SUUMO」の編集長の池本洋一さんにお話をいただき、浦和で幼稚園のパパ友が集まって一般社団法人をつくって地域づくり、あるいは人と人の有機的なつながりっていう組織をつくっている、という実例を紹介していただきました。

そのほか「d design travel」というマニアックなトラベルガイドの編集長においでいた

できました。それから 2020 年当初に東所沢にできた「角川武蔵野ミュージアム」の学芸員の方に武蔵野の再定義ということで、地域を見直す視点ということでおいでいただきました。また横瀬町の田端さんという非常に発信力のある町役場の職員の方にもおいでいただいています。食の地産地消ということで、いわゆる都市近郊農業を行っている武田さんという方、サツマイモの生産とそのサツマイモを使った「OIMOcafe」ということを展開している方にもおいでいただきました。

ゲストスピーカーの講義について、新たな知見を得た、刺激を受けた、学びになったなどの選択肢でアンケート取ってみると、一番多かったのが「食の地産地消と地域農業」でした。

## 人文系学部独自の SDGs との連携のしかたを検討したい

大切なのは大学として、特に人文系学部がこの SDGs に取り組むときに、社会に開いているということ。開いた学びというものをどう提供していくか、ということが必要になってくるのではないかと思います。それはもしかしたら人文研究センターが持っている、そもそもの理念です。学生闘争の中から、その反省の中から出てきたこの人文研究センターであったり、あるいは文学部が非常に重要視している人文学の再創造ということ。これが SDGs というフィルターを 1 枚かませることで、もう一度再考する機会になってきているのではと思います。

どうしても SDGs というと、工学部系や建築系など、目に見える形で社会との連携がしやすいと思うのですが、人文系学部独自の在り方というものを検討していくことが重要になってくると思います。

---

## パネルディスカッション

逸見：お三方のお話、非常に参考になりました。学生は 4 年間、立教大学のある豊島区に通うので、学生にとって豊島区は第二の地元だと思います。区のほうから「バスケットがあるんだけど乗っからない？」というようなことを発信していただけると、創造的なことができるのかなと思いました。地域社会を変えていくのは「よそ者・若者・ばか者」だとよく言われています。学生は「若者」であり、「よそ者」であるということなので、地域とコラボレーションしていけるのではないのでしょうか。これは SDGs で言うところの、パートナーシップ（ゴール 17）に帰結するのではないかと思います。ながら、お話を伺っておりました。

橋本：観光は、SDGs と様々な面で関わってきます。その中で、「SDGs、あるいは環境問題や

環境教育に観光がいかにして貢献し得るか」という問題意識を持つてる学生が増えていると感じております。

伊藤さんの講演のなかで、「花火×キャンプ」イベントの話が印象に残りました。思い出したのが、「土手の花見」という話です。「土手の花見」というのは、春に花見をして土手をみんなで踏み固め、水害を防止するということ。楽しみながら防災も結果的には考えていける。3.11 のレガシーっていうものが、うまくできていくといいなというような気がしました。

奥島さんの講演では、池袋駅の乗降客数が非常に多いという話がありましたし、人口密度の話もありました。そういう住民と観光客が混在していることが、特徴として挙げられます。豊島区に関して言うと、埼玉県出身の方々が多く日帰りに遊びに来るということも含めて、大学に通う学生、勤務員、日帰りでのレクリエーションの方々、そして泊まりがけの観光客、そして住民というように、集う人たちの多様性っていうことが非常に大きな特徴となっています。SDGs を考えるに当たって、こうした交流人口・関係人口との関わりのなかでどう構築していくのかっていうことは、私自身も興味があります。

伊藤：去年からいろんなイベントもやらせていただいているなかで、組織だけが頑張るのではなくて、地域住民と一緒にやっていかなければ、SDGs だけではなく、まちづくりも、促進できないだろうという考えを、私たちは持っております。例えば大学であれば学生、豊島区であれば区民をどのように巻き込んでというか。動く学生を育成する、動く市民を育成するみたいなことは、難しいとは思いますが。そこを乗り越えてどうやって巻き込んでいって、具体的にどういった活動を生むのか、そのようなところを詳しくお伺いしたと思いました。

陸前高田の場合は花火をやっているのですが、前回の花火大会を受けて、地元の小学校の校長先生、保護者さんから、大会の後の花火の殻拾い、海岸清掃を学校行事にしたいというお話を受けました。伝統行事あるいはイベントに合わせて子どもたちが海岸清掃、花火の殻だけじゃなくてペットボトルといったごみ拾いっていうものをしていくような活動に、これからつながっていくのかなと感じているんです。

奥島：伊藤様のお話の中にもあったんですけど、公共・行政っていうのは、スピード感の部分で劣る部分っていうのあるのかなと思いますが、SDGs を単品で言うと、いろんなことをその行政でもやっています。ただ、それを複合的に進めるっていう面では、行政は弱いかもしれません。民間が自立的に動くために、うまくバックアップできるような体制をわれわれは取るべきなんじゃないのかなとは思っているんです。

上田：まず、奥島様から提起された問題です。行政と民間企業と市民あるいは住民を、どの

ようにつなげたらいいのかということです。そこに大学がどのように関わったらいいか。例えば、観光という側面で、橋本さんが実践のなかで、行政と民間企業と住民のコラボレーションということについて、感じられてることはなかったでしょうか。

橋本：先ほど奥島様がおっしゃられたとおり、行政に求める役割は、バックアップする体制を創るということではないでしょうか。住民の方々と、交流人口や関係人口に関わる方々が交流する場をつくり、機会をつくるなかで、いかにして伊藤様が活躍しておられるような体制を整えるのか、あるいは財政的な支援ができるか。そのためには行政のなかから、個人的にも民間の活動に積極的に入っていきながら、その活動から求められていることを理解できるような方々が増えていくことが大切です。人間関係が非常に重要になるわけですが、民間の方々とスムーズな関係がつかれそうになってきたときに、担当の職員が異動になってしまうということが、役所ではしばしばおきます。その辺りが難しいところかなという気がしています。

伊藤：行政に求められることは、やはり人材育成なのかなと思っています。行政職員ではなくて、いかに区民というか、行動してくれる市民を育成するのかというところです。何でそう思ったかと言うと、もともと僕は自分から動くようなタイプではなかったんですけど、東日本大震災があって、自分でもいろいろ何かしなきゃっていう状況になって、やむにやまれず動きはじめたっていう経緯があるんです。

陸前高田市が「ノーマライゼーションという言葉のいないまち」で復興計画を作ったんです。ただ、ふわっとしていて、具体的に何をやるのかいうこのを、市民が全く理解できてなかったんです。不満が噴出してという状況のなかで、たまたま僕がパラスポーツの競技団体の方々と知り合う機会があって、いろんな課題を聞いた。だったらこの町を、パラスポーツの聖地にしたらいいのではないか。もともと合宿とか行われていたような地域だったので、スポーツの誘致がパラスポーツに変わるだけだから、市民もずっと入ってくるんじゃないかなっていうので、行政に相談しました。それをいろんな民間企業、それこそ東京であったりとか、市内であったりにと交渉するなかで、日経 BP 社を紹介していただいた。日経 BP 社から、パラスポーツの聖地という事業で、「SDGs の未来都市」を申請しないかという話を伺った。そこで陸前高田と日経 BP 社と協定を結んで、日経 BP 社に協力してもらって申請書を書いた。なので陸前高田の SDGs 未来都市の事業の中に、パラスポーツと e スポーツっていう文言が入っているんです。そういう行動をする人材を育成するところに注力していくことによって、SDGs に関する目標が立ってきたときに、その目標に向かって行政をサポートする人材が現れるのかなと思います。

奥島：暮らしのなかにある、なかなか使われない小さな公園を使われるようにするためには、何が必要なのかという点で、おっしゃるとおり、必要なのは地域の人間力だと思ってるんです。コミュニティーの活性化につなげていくことになると思います。

伊藤様の「おっしゃっていた行動する人材の育成ということについて。われわれ基礎的自治体のなかで、いま何が起きてかという、かなり権限が下りてきてる。そのなかで責任も当然ある。じゃ、何が職員に必要なのかっていったときに、高野区長もよく言ってるんですけど、「できない理由を探すな。できる理屈から探せ」、「できない」「できる」のどちらで規定を読むのか、それを自立的に考えることができる職員を育てていくことが、地域と一緒にやっていくなかで重要なのだと私は思っております。

伊藤：僕も全く同じです。震災前は「できない理由」ばかり考えてたんですけど、震災後には「できない理由」なんていくらでも挙げられるじゃないですか。SDGs しかり、まちづくりしかり。でも結局それって自分が「できない」と思ってるだけで、人同士が繋がったら「できた」、自分1人じゃできないけど、それこそ地域だったら「できた」とか。他人に行動してもらうためには、やっぱり自分自身が動かなきゃなっていうふうに思って、「できる理由」をとにかく探し続けようみたいなマインドで今はやってるんです。この豊島区の行政の皆さまに、今まさに浸透させていってるっていうのは、ものすごく未来を感じますよね。